第６組光泉寺住職　吉田顕成

「『自然（じねん）』ということ」

私はこの１１月で満６０歳になります。同窓会などで集まると、退職後のことや生活習慣病に罹っている症状のこと、そして頭髪の状態のことなどが知らない間に話題の中心となっています。それぞれの頭の中では、「自分は何時までも若い」「変わらない」と思っていますが、記憶力や体力の衰えは間違いなく年齢を表しています。しかし、自分だけは違うと思って鏡を見ますと、そこには友人達と同じような姿が映っています。頭の中の思い込みと鏡に映っている身の事実のギャップが、老いの苦しみでありましょう。

人は老いて、病んで、死にゆく身であります。それが自然（しぜん）の道理であります。その私自身もこの世を生きて、やがて老いて、病んで、死にゆく身であるとうなづけたとき、「自然（じねん）」といえるのでしょう。「じねん」とは「あるがままに」ということで、漢字では自然（しぜん）と書いて、読み方を「じねん」と言います。仏陀釈尊は「自然（じねん）」あるがままということがうなづけた時、老いも病も死も怖くなくなると説きます。

阿弥陀経の中に、健やかなときも、病んだときも、幸せなときも、悩んだときも、赤色は赤の光を、青色は青の光を、白色は白い光をいつも放つように、あるがままに精一杯生き抜いていくという事が教えられています。

親鸞聖人は自然法爾（じねんほうに）章に、「行者の　よからんとも　あしからんとも　思わぬを　自然（じねん）とは申すぞと聞きてそうろう」と示してくださっています。

お経や親鸞聖人が残された言葉をどれだけ読んでみても、老いの苦しみからは逃れられませんが、「自然（じねん）に生きている」という教えを抱きつつ、今後とも生活してまいりたいと思います。